



令和7年度 一般選抜入学試験 個別学力試験
出題意図

(国語)

前期日程

大問一

・ 出題意図

松井哲也「AIの手を掴むくらいなら溺れて死ぬ」(『現代思想 2024 年 3 月号 特集＝人生の意味の哲学』)からの出題です。この文章では、AIが人間の生活に大きな影響を及ぼすようになった時代における人生の意味を、身近な例を通じながら、そもそもAIとはわたしたちにとってどのような存在なのかという問題にまで遡って考察しています。著者の論理的追及の過程を粘り強くたどる力を問うています。

・ 講評

問 (一) 解答 (1)端的 (2)自明 (3)脅威 (4)鑑賞物 (5)失踪者

基本的な常用漢字の知識を問う問題です。他の同音異義語との取り違えによる誤りが目立ちました。

問 (二)

AIが人間よりも「上手く問題が解ける」ことに対する、著者の批判的な視点を読みとることが大切です。傍線部からは離れますが、7 ページ 6 行目からの「AIが人間よりも早く「正解」を導き出す、と言った際、実際にはこの程度のことを言っているにすぎない」という箇所に、著者の視点が明確に表われています。傍線部直後にある第二次 AI ブームに関する記述にもとづいた誤答が一定数見られました。

問 (三)

傍線部直前の段落だけでなく、「このような問題」について論じられている箇所全体の内容を、過不足なく要約することが必要です。

問 (四)

「官僚組織」と「人工知能」との対比は、傍線部以降の数段落に述べられています。そ

の趣旨を整理し、対比的にまとめる必要がありました。

問（五）

「異類」の「外部」性と「人工知能」の「ブラックボックス性」との類比を、本文後半からの確に理解することがポイントです。また、日常の論理の「相対化」とはどのようなことを、本文全体の文脈に即して把握しておく必要があります。「相対」を単に「向かい合う」「対立する」といった意味に理解したと思われる解答が一定数見られました。

大問二

・出題意図

木内昇の小説『剛心』からの出題です。建築家・妻木頼黄の妻ミナの、夫の内面に向けるまなざしの濃淡が夫や夫を支える人々とのやりとりを通して丁寧に表現されています。その具体的なやりとりからミナ自身の感情の変化や、ミナが夫の言動をどう理解したかということを読み取った上で、妻木の志や愛情、夫婦の関係性を推察し、簡潔に表現する力を求める問題です。

・講評

問（一）

語句の意味を文脈に即して問う問題です。問われた語句の一部のみの説明、語句とは関係のない形容詞の誤答が見られました。(3)の説明に不十分なものが多く見られました。

問（二）

鎗田の心情の内容について、誰のどのような行動に向けられた心情なのか、正しく把握し、簡潔に説明することを問いました。全くの誤答は少なかったものの、部分的な説明にとどまる答案が少なからず見られました。

問（三）

ミナが妻木の言動を通して、夫の仕事に対する心構えや、その仕事の持つ意義をどのように理解したかを問うています。本文全体を踏まえる必要がありますが、問いの直前部分のみに着目した答案や、ミナの心中を踏まえていない解答が散見されました。

問（四）

「お伽噺のようだ」という喩えの指す意味を、ミナの心情を理解したうえで説明するこ

とを求める設問です。「お伽噺」を言い換えないままの答案、街並みの変化という事実のみを記した答案が一定数見られました。また、何を「お伽噺」に感じたのか、正しく読み取れていない答案も散見されました。

問（五）

ミナが発しそうになった「え？」という反応の意味を、文章全体を通して描かれる妻木の言動や、ミナの妻としての自己評価、さらには夫婦の関係性から推測し、適切にわかりやすくまとめて表現することができるかどうかを問うています。ミナが妻木の喪失感を理解したことは概ね解答できていました。また、「呑み込んだ」という表現に引きずられるあまり、内容が不足している解答が少なからず見られました。

大問三

・出題意図

平安時代の王朝物語『源氏物語』「椎本」巻からの出題です。主な登場人物は匂宮と宇治の姉妹（大君と中の君）の3名。匂宮と、亡き父宮の一周忌を迎えても悲しみが尽きない宇治の姉妹とが手紙をやりとりする様子が、晩秋から初冬の風物とからめて情緒的に描き出されています。主語が省略されてはいるものの、敬語表現を手がかりにすることで主語を明らかにしつつ、人物の関係をとらえながら読み進めることができます。基本的な古典文法と古語の知識を踏まえた読解力、問われていることについて過不足なく記述する表現力が求められます。

・講評

問（一）

古語の知識をもとに、文脈に即した語句の意味を読み取る力を試す問題です。(1)は「便なし」、(2)は「よしづく」の訳ができているかどうかポイントです。それぞれ基本的な語義から離れてしまっている解答が見られました。

問（二）

古語や古典文法の知識に加えて前後の文脈の正確な理解が必要な口語訳の問題です。前後の文脈から主語を正確に読み取る必要がありますが、匂宮を主語としてしまっている答案が散見されました。また、傍線部が手紙のやりとりに関わる発話であるという前提が抜け落ちている答案も見られました。

なお、この設問の傍線部のあたりから、少なからぬ受験者が主語を取り違えて読み進めてしまったがために、以後の設問の解答に影響していたようでした。

問（三）

和歌の詠み手とその意味内容を、前後の文脈から正確に読み取る力を問う設問です。詠み手を中の君とする答案が多く見られました。傍線部直前までの内容を注意深くたどれば、この和歌を詠んだのが大君であることは把握できるはずです。また、和歌の趣旨を問う問題であるにも関わらず、語句の意味に気を取られすぎて、核心部分（宇治の山里では姉妹が今も父宮を亡くした悲しみでともに泣いている）を曖昧に記述してしまっている答案が見られました。

問（四）

登場人物に向けられた批判的なまなざしが、誰からのものなのか、またその批判の内容を本文に即して説明できるかどうかを問う設問です。ここでも登場人物の取り違えが多く見られました。また、「大殿籠らねば」の助動詞（下線部「ね」）の意味を的確に把握できていないがために、物語の展開からかけ離れてしまっている答案が見られました。

問（五）

大君が、自身が勾宮に色よい返事を与えてしまうことで、どのような懸念が生じると考えているのか、本文の内容に即して過不足なく説明できるかどうかを問う設問です。ここでも主語を勾宮と取り違えて、勾宮の、宇治の姉妹に迷惑が及ぶことを恐れる心情とする答案が多く見られました。

大問四

・出題意図

銭泳『履園叢話』からの出題です。依頼者が示す漢字の全体及び部分を見て占う「測字」にまつわる逸話です。親子二代にわたって「測字」を生業とした「朱某」とその息子が、「正」「武」二つの漢字について占った出来事の顛末が記されています。基本句法・語句の知識だけでなく、その知識を活かして丁寧に読解して文意を把握すること、そしてその内容を簡潔な言葉で表現することを問いました。

・講評

問（一）

(1)、(2)ともよくできていました。ただ、(1)に関しては、直前に呉三桂が登場するため、「将」を将軍のことと勘違いした答案が見られました。また(2)に関しては、「死亡した」といった、漢字の印象にとらわれてしまったような答案が複数見ら

れました。

問（二）

（ア）、（イ）ともよくできていました。ただ、（イ）に関しては、「果」を「はたして」ではなく、名詞「か」と読んでいる例が多く見られました。また、「応」を再読文字として読んだ誤答もありました。

問（三）

「但」を「ただ～のみ」と読むことができていない答案が見られました。また、前半部と後半部とが、日本語として自然なつながりになっていない答案が見られました。

問（四）

直前の部分にとらわれてしまって、「之」が指示する内容を「朱某の占いの結果」とするなど、文脈を取り違えている答案が見られました。また金を貸す相手を慕公、あるいは蘇藩庫としている答案もありました。解答にあたっては、末尾に添えられた（注）を含めて、本文をしっかり読むことが重要です。

問（五）

正答率は高くありませんでした。まず、誰と誰によって、何が行われている場面であるかが把握しきれていない答案が多くありました。とくに、「朱某が自分の家系は途絶えたと占った」と誤って理解している答案が目立ちました。また、朱某の息子が、依頼者が示した「武」という漢字の形を見て、なぜ「一代無人、自此而止」と占ったのか、その過程の具体的な説明が書かれていない答案も多数ありました。その一方で、完璧な答案も少なくありませんでした。

○志願者へのメッセージ

国語を課す目的は、上質な文章を読解する力と、自身の考えを的確に表現する力を身につけた学生の選抜です。出題を通じて、1) 論理的な文章の内容と抽象的な表現の意味するところを把握する読解力、2) 文学的な文章の内容と表現の意図を推察する読解力、3) 古文と漢文に関する基礎的な知識と文章の展開を追う読解力、4) 定められた字数の中で要点を的確に説明する表現力、これらの各点を評価することとしました。

論理的な文章では、専門的な概念や聞きなれない抽象表現の意味内容を、本文の記述から理解し、論点を正確に追いながら、著者の主張を把握することが重要です。

文学的な文章では、著者の表現に込められた登場人物の心情を推察する読解力が必要です。論理的な文章でも、文学的な文章でも、読み取った内容を設問の指示に従って的確に表現できる能力を身につけてほしいと思います。

古文・漢文は古語・漢語と古典文法・句法についての基礎的な知識をもとに、文章を読み込んでいく必要があります。単なる知識の暗記にとどまらず、知識を活用した丁寧な読解を心がけてください。そのように読解した内容を、設問の意図に沿って、現代の日本語で過不足なく説明できる表現力も習得するよう努めてください。